

19世紀のガイドブックの発展

—— ライヒャルト、マレー、ベデカーのガイドブックを中心に ——

スウェン・ホルスト

Abstract

This article describes the development of guide books during the 19th century on the examples of Reichard from the end of the 18th to the 1830s, and Murray and Baedeker from the 1830s onwards. Murray and Baedeker are well known as the founding fathers of the Guide books industry. Reichard's guide books were internationally famous and he rewrote, renewed the information and republished his guide books, with a strong international orientation in subjects and languages, demonstrating the direction for further development for this genre. The “how to travel” was still more important than the “where to travel” during his time and with the development of tourism industry the new type of Guide books produced by Murray and Baedeker replaced his. Although Murray and Baedeker influenced each other, the public favoured Baedeker's book in the end.

はじめに 19世紀のガイドブック

ガイドブックは旅行者のニーズに合わせて執筆される。その意味ではガイドブックが当時の旅行文化を描写しているといえる。しかも、ガイドブックには旅行者を導く役割もあるため、旅行者がそれに従って行動する。よって、ガイドブックは旅行文化を形成する役割をも担う。

チューター（家庭教師兼ガイド）に率いられる若い貴族の教養的なヨーロッパ旅行（Grand Tour）の時代が終わり、個人旅行の増えた18世紀末から、ガイドブックは近代観光の要になったといえる。21世紀は、デジタルメディアや SNS の隆興によりその役割が危ぶまれている。

19世紀のガイドブック業界では前期にライヒャルト（Reichard）、後期にベデカー（Baedeker）という二人のドイツ人が重要な役割を果たし、市場の大きなシェアを占めた。18世紀から文化の中心地はフランス、産業・貿易の中心地はイギリスであった。政治の指導権争いがフランスとイギリスの間で繰り広げられていた。対照的にドイツは政治的・経済的に後進国であった。学問の分野においてドイツは早くも追いついたが、ドイツ人学者たちは外に目を向けてフランス語や英語を操ったのである。研究や研修の目的で多くのドイツ人が外国に出向いた。こういった環境のもと信頼のおけるガイドブックへのニーズが高まることとなった。

ドイツ語圏だけではなくヨーロッパ全土においてドイツ人の著者・編集者のガイドブックが時代の象徴となった。ガイドブックの出版社は他にもあったにもかかわらず、19世紀前半にはライヒャルト、19世半ば以降はベデカーがガイドブックの代名詞となった。この論文では、当

時のガイドブックを比較しながら19世紀を中心とした観光のあり方を考察し、これら2種類のガイドブックの成功の理由を探る。

19世紀のガイドブックは、基本的に1人旅をする旅行者向けのハンドブックであった。18世紀までのグラン・ツアーにはチューターや詳しい人が付き添った。ライヒャルトは旅行者に対し安全な旅に必要な知識を伝授した。1830年代、ライン川を定期運航する汽船や20年後の鉄道の登場により旅行は高速化しただけではなく簡単にもなった。旅行が身近になったことにより旅行者が増えて、旅行者用のインフラも発展してきた。そうしたこともまた観光の促進に拍車をかけた。

マレー (Murray) とベデカーは西洋でだけでなく日本においても紹介され、資料として使われている¹。ライヒャルトについての報告があまりないため、この論文では、ライヒャルトを詳しく扱い、後継者であるマレーとベデカーと比較する。マレーとベデカーの競争では後者が勝利したことから、特にベデカーにも焦点を当てる。

1. ライヒャルトのガイドブック

18世紀末～19世紀前半にガイドブックの基本を作ったのはハインリヒ・アウグスト・オトカル・ライヒャルト (Heinrich August Ottokar Reichard) であった。ライヒャルト (1751年～1828年) はザクセン・ゴータ公国 (Herzogtum Sachsen-Coburg und Gotha) に生まれ、家庭教師に育てられ、ゲッティンゲン大学 (Universitat Göttingen) とライプツィヒ大学 (Universität Leipzig)、イエーナ大学 (Universität Jena) に通った。文学活動からゴータの宮廷劇場の責任者となった。前途多難ではあったが、この時期に広く注目された当時のドイツの演劇年鑑を編集した。その後、彼は侯爵の図書館の管理人、さらに軍事参事に任命された。1784年、ライヒャルトが自身の旅行のために編纂したガイドブックである『すべての身分の旅行者のためのハンドブック』を出版した。

「旅行者ほど本を持ってない者はない。そこで、旅行者が数百冊の著作から自身を導いてくれるもの、もしくは行き先となる国々について啓蒙を与えてくれるようなものを選抜する手間を省くことができれば有益となるはずだ。文学の世界において編集と呼ばれる作業がそうした状況下で役立つだけでなく、功績となるのはこれが唯一のケースだと私は信じている。他者については分からないが、コンパイルは確かに、非常に骨の折れる、それでいてありがたい作業である。選択性、信頼性、忠実度は、そのような編集に必要な3つの要件といえる。」²

1 石井、加賀美。

2 Reichard (1784) p. a2.

「多くの取り組みがなされているにもかかわらず、あちらこちらで未だに一定の追加が必要であることは明らかである。この種の作業は、性質上、誤りがないわけではない。しかし私は、あらゆる訂正の提案を慎重に精査し（出版社または私の住所宛てに送っていただきたい）、いつしか新版または補遺として使用したいと考えている。ここで説明したほとんどの国を訪れるという私の願いが叶うなら、経験と観察に基づいていくつかのことを改善したいと思っている。こうした欲求こそが、最初に自分自身の旅行のために使用しようとこの編集作業に従事することになった原動力であった。」³

ライヒャルトは、結婚前にスイスを旅行して、その後、妻とともにスイスやパリを訪れた。自身のスイス旅行のための情報収集はガイドブックの基盤となった。そして、旅行経験もガイドブック編集に影響を与えた⁴。しかし、遠方への旅をすることなくこのハンドブックを出版した。最初にそのことを読者に明かしたうえで、旅行者に役立つような参考文献を数多く盛り込んだ。初めから継続性を目指した点がかつてない重要なポイントであったといえる。それは彼が以前編集した演劇年鑑の影響と考えられる。

初版の完成度は高くはなかったが旅行者には歓迎されたようである。初版には16ページに及ぶ「旅行の意義」や64ページに及ぶ「郵便制度の歴史」が含まれており、各国の郵便馬車制度、各国の地理、参考文献、各国の通貨、各国の測定単位、ローマの遺跡、豆知識、諸都市との距離、有名な祭り、ドイツ国内のさまざまな金銀の単位、名産品、数年先までの復活祭の時期、昼と夜の長さの違い、乗馬で旅行する人へのヒント、102の都市の説明、181のルート、参考文献、健康のためのアドバイスが盛り込まれていた。この目次からもわかるように、さまざまな内容がかき集められていたものの、その整備は不十分であった。

「このハンドブックを1784年に出版したとき、他の旅行者の本以外に参考となるものがなく、そこから自分で作成した計画に従って情報を収集した。それ以来、私は幸運にもさまざまな国に何度か足を運び、自分の経験からそうしたハンドブックで何が必要で何が不要なのかを確認することができた。特に、さまざまな国の町や郵便制度の情報が最も有用で役に立つことがわかった。そのため、私は編集の際にこの2つの項目に最大の注意を払ったのである。」⁵

「私は海峡を渡り、海峡を間近で見たり、その島々を間近で見たりする喜びに浸ったことはない。この国をととても誇りに思い、とても素晴らしく、時には賞賛され、時には非難され、羨望と賞賛の永遠の対象ではあるものの、それだけで自慢に値することが、革命のハ

3 Reichard 1784, 序言の中から p. 4.

4 Uhde 1877, p. 186～198博物館、図書館、刑務所等の教養的な見学に疑問を抱いて、より重要な旅行の学習がある。p. 188.

5 1792年版の序論から。

イドラに屈していないことを誇りに感じている。

しかし、イギリスを旅行した旅行者、そして最近さらに2人のアメリカ人が、その場で書かれたと信じて、私のガイドに敬意を表した。』⁶

「後年、マレー（1829年から出版）のガイドブックはライヒャルトのガイドブックの地位を奪い取ることができず、ベデカーのガイドブックにその地位を明け渡さなければならなかった」⁷、と19世紀末の人々は評価した。ドイツ人の愛国心という眼鏡を通した見方だったのかもしれないが、同じ19世紀末のフランス語の百科事典もライヒャルトのガイドブックの正確さを評価していた⁸。

18世紀末や19世紀前半のガイドブックは観光地の宣伝であったり、旅行紀行文であったり、1回出版されたのちその評判が広がった時点で情報が古くなった。ライヒャルトは正確さを求め、編集し直して再版したので、その評判が長きにわたって定着し、市場にまで広がった。少なくともフランス語の市場、当時ヨーロッパ中のすべての上流階級を積極的に狙ったことも成功の要因であった。

ライヒャルトは、後版で「旅行の意義」や「郵便制度の歴史」を削除した。啓蒙主義から実用への転回で彼は後に、ガイドブックを大幅に組み替えた。タイトルも「ハンドブック」から『ドイツと隣国を旅する通行人』とへと変更した。

表1 ライヒャルトの『すべての身分の旅行者のためのハンドブック』（1784年）と『ドイツと隣国を旅する通行人』（1811年）の比較

1784年	1803年
旅行の意義	便利な一般情報
郵便制度の歴史	安全対策、荷物、現金、手形、旅費の予算
各国の郵便馬車制度	芸術と商業のために旅する若者へのヒント
各国の地理	出張する商店手伝いへのヒント
参考文献	旅行者のための健康のための規則
各国の通貨	気候学
各国の量と測り	様々な旅行のやり方
ローマの遺跡	外国の特急馬車の短い情報
雑	ドナウ川とライン川の旅行の描写
諸都市の距離	宿泊舎の中の旅行者
いくつかの有名な祭り	手紙提出の注意事項
ドイツ国内の様々な金銀の単位、名産品	都市の間の距離
数年間の復活祭に磁気	ドイツと隣国の通貨
昼と夜の長さの違い	ドイツと隣国の質量と重量
乗馬で旅行する方へのヒント	算数の関する
102の都市の説明	ドイツの統計的なデータ
181ルート	ドイツ高山地の旅の描写

6 Reichard 1820の序言, p. III.

7 Rupp, p. 139.

8 Bouillet-Chassang, p. 1592.

19 世紀のガイドブックの発展

1784年	1803年
参考文献 健康のためのアドバイス	浴場旅行の規則といくつかのドイツ浴場の説明 スイスの旅行 パリへの道 ペタースブルクへの道 ドイツ中の99つのルート、良い宿泊舎、いくつかの街の名所 アルファベット順の地名 補遺

Reichard, Heinrich August Ottokar (1784): *Handbuch für Reisende aus allen Ständen*, Leipzig.

Reichard, Heinrich August Ottokar (1811⁴): *Der Passagier auf der Reise in Deutschland, in der Schweiz, zu Paris und Petersburg Ein Reisehandbuch für Jedermann*, Gädick.

ドナウ河とライン河の旅は具体的な旅行情報であるが、「船旅」と言い替えることで、目次の中の位置を理解することができる。そして、旅行の心得、旅行計画、旅行、索引を整理した。1793年のハンドブックと同じ年にライヒャルトはワイマール公国の産業局からフランス語版を出版した。このフランス語版はライヒャルト自身がフランス語で執筆し、同年のドイツ語版より内容の整理がより進んでいた。ライヒャルトの1803年の「通行人」は、すでに1793年にフランス語で生まれていた。「通行人」が時代の変化を反映している。初版は、旅行の意義に触れるのみならず、19世紀からさまざまな階級と年齢の人々が旅行することを想定して、温泉（浴場）旅行というテーマを取り入れた。具体例として1811年（第4版）の目次を紹介する。ページ数からその作品の重点を読み取れる。

表2 ライヒャルト『ドイツと隣国を旅する通行人』（1811年）の内容の小分けとページ

I 序の代わりに、いくつかの一般的なルールや経験	a) 総論	健康；旅行の影響と利点；この本の目的；旅行スケジュール；余りにも短い旅行；出発前の予約；パスポート；衣服のための費用、言語およびその補助；密融品と予防策；フランスの税関；現金に関する税関に必要な注意；検査；旅行の知恵；トラベルジャーナル；ポスト図書；都市や国を知る方法；寛大さ；良い気分；ゲーム（キャンブル）；未知の旅行仲間	1
	b) 安全のための心得	旅の仲間；使用人；自国の大使への届；ダブル銃；強盗の襲撃；いつライフル銃を使うべきですか？；質入り；ライフル銃の弾薬に注意、夜中の川と森林の通行；大都会での窃盗；推薦状	19
	c) 荷物や旅行用具	荷物を少な目；書類の保管；スーツケース：いつ荷造りするべきですか？；ガード；ナイトサック、カバンコート；旅行ボックス；旅行用ベッド；まとめやすい旅行用寝具；巻き上げ式ブラインド；旅行用のマグカップやカトラリー；スクリュエロック、夜用かんぬき；快適な羽根ペン；科学機器；文庫本、ライター、針、糸	25
	d) 現金、信用状、手形	両替相場、クレジットレター、手形、紙幣	39
	e) 旅費の見積もり	見積もりの必要性；一般的な規範の不可能性；1マイル当たりの質素な旅と特級車の旅のコスト；居酒屋；観光にかかる費用；大都市に滞在；旅行者身分の最後の賞賛	40
II 芸術や商業のため外国を旅行する若者のための規則			44

III 旅行者の健康面での行動に関する規則	a) 旅行者のための一般的な健康規制	一般的な健康上の規則；空気の性質；食品；飲料；運動；雷雨；有毒な霽物質；その他の警告；旅が始まる前に何をすべきですか？；妨げられていない蒸発の必要性；料理、ワイン、ミネラルウォーター、井戸水の選択；静かな消化；他所のベッドの危険；官能の有害性；夜間旅行のデメリット；加熱；都市の臭い空気；医師の選択	49
	b) 水上の旅行者のための健康規制		64
	c) 徒歩の旅行者のための健康規制		66
	d) 乗馬の旅行者のための健康規制		69
	e) 携帯の薬箱、応急処置キット		70
補足	1) 病室内の空気の必要な清掃について		73
	2) 疫病の時の行動規則、パウルス博士著		75
	3) 緊急危険の時の救助装置、シュトルーベ博士著	溺死した人；首を絞められた人；窒息した人；雷に打たれました人；落ちて、意識不明の人；致命的な新生児；狂犬病の犬に噛まれた；中毒；燃焼；総論	78
	4) 医療雑文	子供には気をつけて；歯痛；日射病；耳痛；閉めた口蓋垂、扁桃腺の腫れ；虫刺され；うがい水；空気の純度をテストする	83
IV 気象学		昔からの月に関する修道僧の歌；動物に天気が表示される；太陽；月；星；良い天気；雲での雨の表示、遠方の物体で；ストロークの雲で；霧とその表示；砂混じりの雨；風とその解釈；気圧計とその発表；風と気圧計の組み合わせ；山の中の天気予報；雲での天気予報；高度の煙；森と岩；遠くの稲光；露；電位計；温度計；湿度計；流れ星とオーロラ；下水溝の煙と匂い；植物による天気表示；最も安全な気象予言するのはクモ；その表示の表	87
V ささまざまな旅行方法について	a) 徒歩の旅	徒歩旅行の快適さ；居酒屋；どの国で、どの安い食べ物？；衣料品；かばん；コートを運ぶ人、同時に案内人；旅行する時間；余裕を持って、着実に進む；体を丈夫にする洗ひ方；侍者；パスポート；風、雷雨；道を調べる；他のセキュリティ規則；注意深さ；防衛；歩数計；健康；タバコの喫煙	105
	b) 乗馬の旅	この旅行方法の便利さ；馬の年齢；旅行の前に注意点；一日旅行；昼休憩；サドルの着け方；まぐさ桶；馬を洗う；疲労；蹄鉄の頻繁なチェック；馬の蹄鉄を打つ；食欲不振；硝粉末；厩舎を渡します。カモミールエリクシール；一般的な規則；荷物；服装；武装；ピストルで護衛料から解放；宅配便；乗馬している使用人；便利な文庫本	117
	c) 自分の車両、自分の馬または雇われた馬での旅行	貴重で時間がかかる；警告看板を読む、自分の馬とどこで旅すべきか？；いくつかの規則；車；賃労コーチマン；いつ賃労御者を取るべきですか？；いくつかの規則；帰路の車両；強制的な追加料金；それに関するいくつかの国の規制	127
	d) 郵便馬車またはコーチで旅行	不便さ；このタイプの旅行の快適さ；カンントリーキャリッジ；ウィーン、プラハ、ライプツィヒ、レーゲンスブルクでのそのようなコーチ；いくつかの規則；荷物の紛失；密乗者；ポストイリオーネのチップ；無料の荷物；郵便為替；フランスの郵便馬車；フランクフルト郵便馬車	134
	e) 特別車両での旅	利点；郵便馬車；いい馬車の用具；ウィーン風馬車；窓付きの馬車；イギリス風馬車（二席、半開き）；二輪馬車；二輪馬車と尉リリス風者の所有者へのアドバイス；椅子馬車；郵便料金と追加郵便午の料金；ウェストファーレン王国の郵便規則、ベルク大公国と他の国の郵便規則；馬の数；使用チェック書類；複数の馬を借りる；賄賂；運転手へのチップ；市内の高速運行；迅速な運行、どこ；馬を変える；道路料金；服装；ドイツのトラックの違い；海外でトラックを変更する	147

19 世紀のガイドブックの発展

	f) 水上旅行	さまざまな水上旅行の種類；このタイプの旅行の利点；不便さ；川の旅行：ライン川、ドナウ川；エルベ川；運河や湖の旅行；海の旅；公共またはレンタル船の旅行；いくつかの水上旅行の詳細データ；船と船長の確認に関する予防規則；ボスト船；食事、船の在庫食材の3つの例；台所用の器具；これらの規制の結果；救命胴衣；船酔い；海の旅行の季節；北米への旅	177
VI フランスとイタリアの特級郵便馬車サービスといくつかのアルプス峠についてのメモ		フランス；オランダの曳船；イタリア；チロルを通る道；モン・スニ峠、ゴッタルド峠；グラン・サン・ベルナール峠；シンプロン峠越え；シュプリューゲン峠越え。ニースからジュノヴァへの沿岸道；一般的な注意	197
VII ドイツの2大河川、ドナウ川とライン川の船旅の描写	1) ドナウ川の旅	ドナウ川の利点；ドナウ川岸の美しさ；古代遺跡や城が豊富；ドナウ川の霧；染屋の色材；魚の量；川下りと河のぼり、普通のドナウ船；その説明；個人の船を借りる値段；ウィーンまでの観光スポット；シュトラウビング；ポッペン；デッケンドルフ；フィルツホーフェン；パッサウ；クレンプシュタイン；エンゲルハートセル；ライナハ；リンツ；エンス；グレイの渦；ドナウ川の渦巻き；イプス；マリアターフェル；メルク；スピッツ；リチャードライオンハート幽閉の牢屋；クレムスとシュタイン；ゴットウィヒ；ウィーン；道標や同伴者；船長との安くて速い帰路のメモ	224
	2) ライン川でマインツからコブレンツに行き、温泉町々を経由して戻る	ライン川を移動するさまざまな方法；自分のヨット；ライン船；ライン川左岸の新しい道路；出発；ヨハニスベルク；オストハイム子爵の公園；リュエデスハイム；ビンゲン；ビンゲンの穴；アスマンスハウゼン；バックラッハ；税関城；ザンクトゴア；ポッバルト；ケニグスシュタイン；ノイウィート；エーレンブライトンシュタイン；コブレンツ；温泉経由帰路；エムス；シュヴァルバッハ；シュランゲンバート；ヴィースバーデン；プレート；セルタズ；ファヒンゲン；フランクフルトからケルンまでの往復の旅行計画；カッセル、エーレンブライトンシュタイン、ドイツの旅館；ガイドになる書物	239
VIII 居酒屋での旅行者		どの居酒屋を選ぶべきですか；どうやって最高の居酒屋を訪ねるか；住所を覚える；部屋で慎重にそして選択；冬にはストーブに気をつける；ダニ；対策；知らない人と同居しない；肩書と名前の正しい表示；有価証券の保管；孤独で不審な居酒屋；警察法を調べる；日雇い使用人；洗濯人；食事；食卓；旅館の騒音対策；トイレで気をつける；タバコアカウント；二重チョークの対策；お金を出して両替；チップ	259
IX 手紙で何が注意されるべきですか？		受取人払の手紙と発送人払いの手紙；住所と記入；書留；手紙の返却；前の投稿；早い配達；；留め置き郵便；シングルとダブル、または太字の文字と附属書類	271
X いくつかの都市の互いの距離		アウグスブルク、ベルリン、フランクフルト、ハンブルク、ライプツィヒ、ニュルンベルク、シュトラスブルク、ウィーン、バーゼル、ベルン、シャッフハウゼン、チューリッヒ	277
XI ドイツと近隣諸国の硬貨と両替相場	1 ドイツ	ケルンの金と銀の重量。ドイツの入札価格に関する一般的な注意事項。20はどこにあり、24の足はどこにありますか。残りのコインの足。5 コインフィートの比率。請求書とコース。金とシペロニー。いくつかの国でエンボス金と銀のコインの概要。外国コインサクソンレジいくつかのコイン計算の概要	296
	2 フランスと旧オランダの州	革命前のフランスの通貨と硬貨；革命中の通貨；最新のコイン足；外貨に関する1810年8月の相場；古いオランダの硬貨；アムステルダムでの外貨の相場	311
	3 スイス連邦共和国	1803年製の新しいコインの貴金属の割合、ヘルベティア時代のコインタイプ。さまざまな州の外国コインの相場	317
	4 イタリア	一般規格ナポリ	324

XII	ドイツとその周辺諸国の寸法と重量		326
XIII	算術ミスセル		340
XIV	ドイツの いわゆる高山への旅の 説明	1) ハルツ山脈 2) リーゼンゲビルゲ	367
X	ドイツの温泉旅行の規則 といくつかの浴場の説明	1) 温泉客のための一般的な規則 2) カールスバート 3) フランゼンスバード 4) テプリッツ 5) ビルモント 6) 海水浴所ドーベラン、リュエゲン島、サーガルト、海水浴所ノルダーナイ島 7) リーベンシュタイン 8) ラウフシュエット 9) アレクサンダーズバート 10) ネンドルフ 11) キッシンゲンとボクレト	410 413 426 431 442 447 459 465 468 473 478
XVI	スイスの旅	1) 紹介 2) スイスへの旅行 3) スイスへの旅行と滞在の費用 4) 最安値で最も便利なのは、徒歩、乗馬、カートへのどのような移動ですか。 5) スイスの旅にはどのくらいの時間がかかりますか。 6) スイスの徒歩旅行者のため 7) スイスの山岳地帯を旅する旅行者のために再三読むべき21の重要な規則	480 484 496 511 518 522 529

8) どうやって運転でき、道路を利用できるのか？	538
9) ドイツからスイス全土への大旅行計画：グラウビュンデン州を通る旅の付録	543
10) 12の旅行スケジュール：チューリッヒ、バーゼル、ベルン、ジュネーブでスイスの興味深い部分を見ることを小旅行の計画	568
11) 旅の説明とシャモニーの観光スポット；ガイドたちの名前	577
12) 余裕をもって5週間でスイスの最もきれいな古くて新しい名所を見ることができ、女性および3～4人の団体も適している編集者の新提案	620
13) 地図、銅版画	627

Reichard, Heinrich August Ottokar (1811⁴): *Der Passagier auf der Reise in Deutschland, in der Schweiz, zu Paris und Petersburg Ein Reisehandbuch für Jedermann*, Gädick.

イギリスの出版者がライヒャルトのフランス語版を翻訳した⁹。ただし、イギリスではマリアナ・スタークのフランスとイタリアをテーマしたガイドブックが人気であった（1802年以降）。スタークのガイドブックの出版社はマレー社であった。その意味では、近代的なガイドブックの草分け的存在はスタークであった。さらに、イタリア語版もあるはずだった。しかし、多くの上流階級の人々がフランス語版を使ったと考えられる。フランスやロシアの将校たちがライヒャルトのガイドブックを携行したそうである¹⁰。旅行ブームと指摘されたが、まずはそれまでにはなかった軍隊による遠距離的な動きと相まって、将校たちが進軍する国の情報が必要であった。その情報がライヒャルトのガイドブックに収められた。その意味で、ライヒャルトが軍参与に任命されたことは合点の行くことであった。しかし、ライヒャルトはそのためにハンドブックを書いていたわけではなかった。

2. ライヒャルトとマレー、ベデカーの比較

上にライヒャルトの目次を紹介したので、ここではマレー（John Murray 1808～1892）とベデカー（Karl Baedeker 1801～1859）¹¹のガイドブックの目次を比較してみる。ライヒャルトが関わった3冊とマレーの1冊、ベデカーの1冊を比較する。目次から判断できるように、ライヒャルトが旅行方法、マレーとベデカーが旅行先に重点を置いていた。その当時、旅行の快適さが汽船と汽車の導入によって大きく高まった。ライヒャルトの時代には旅行者が交通、宿泊、案内と、すべて自分で手配しなければならなかった。そのことも、以前の若い貴族のグランド・ツアーとは異なっていた。マレーやベデカーの時代に観光産業が発達し始め、汽船運航社や鉄道会社が旅行者の手配を代行し、旅行者の手間を省こうとしたマレーが、1837年に「大陸の旅行者のためのハンドブック」を初めて出版した。序文には以前のガイドブックとの違いが説明されている。

「これまでに発行されたガイドブックのほとんどは、その場所に詳しくない人が編集した一般的な説明であるため、不完全で誤っているか、あるいはこの市民が書いたただの地

9 Reichard, Pezzl 1819.

10 Rupp, p. 80.

11 ベデカーはグローバル市場を考えて、苗字を Bädeler から Baedeker に替えた。

方史に過ぎない。彼らは、その場所の特徴と見るに値しないものと十分に区別していない。このようなことは他の場所でも同じように、またはより有利にとらえられる可能性がある。後者は、その歴史の細い内容で読者を圧倒する「…」であり、前者は、建物、機関などの単なるリストアップにとどまっている。「…」

ハンドブックの著者は、それぞれの場所で見られるべきものについての事実の説明にとどまるように努力しており、知的な旅行者の興味を引くようにデザインされており、見ることができるものについてあらゆる説明で読者を当惑させることはしない。」¹²

以前のガイドブックが更新されず、以前正しかった情報も誤った情報になると指摘した著者の経験を重視して自身の紛らわしい旅行ノートよりも他人の記録を採用することもある。著名人の言葉の引用もすると序文で説明している。

比較対象としてガイドブックが少し異なる地理的範囲を扱う。よって、対象範囲が広いほど、彼のガイドブックはより分厚くなる。

ライヒャルトと同じく、マレーとベデカーも総合情報の部分と観光地の部分を区分した。ライヒャルトはガイドブックのおよそ半分を旅行情報に割いたが、ベデカーの場合、旅行情報の占める割合は10分の1で、マレーではさらに少なくなった。ただしマレーの場合、各国の章の冒頭に基礎情報のページが設けられていたので、ライヒャルトとベデカーの整理方法とは異なり、基礎情報も多く掲載された。ベデカーが後に出版したガイドブックでも目次は替えられなかった。よって、マレーの例には従っていなかった。

比較対象として、19世紀に人気となったライン川観光の中心地、ローレライ (Loreley) とその前後の町 (北のザンクトゴア (Sankt Goar)、対岸のザンクト・ゴアスハウゼン (Sankt Goarshausen) と南側のオーバーヴェーセル (Oberwesel)) を選んだ。

ライヒャルトは、1811年にはほとんど河に重心を置いていて、あまり上陸して周りの観光を視野に入れていなかった。有名なローレライにも触れていない。ただし、ローレライの知名度はその時期さほど高くはなかった。2番目の著作は基本的にケラマン (Kellerman) が書いたものであるが、ライヒャルトが惜しまず支援・助言したので、ライヒャルトが著者としてクレジットされた。ここでは、人口や生業についての情報が加えられた。1811年のライヒャルトが編集したドイツ語版のガイドブックの後版について確認ができなかった。しかし1821年、ライヒャルトが編集を手掛けたフランス語ガイドブックに変化が見て取れる (取り消し線は1821年までになくなった。斜体は付き加えた情報を示す。1811年に、ほとんどを無視したオーバーヴェーセルの情報とローレライ関係の情報が加えられた。ライヒャルト亡き後、出版者であったヘルビヒ (Herbig) がライヒャルトの作品を編集し続けた。交通手段の変化に伴って観光情報を少し加えたただけであった (例: ロマンチックなスイスの谷)。ヘルビヒが担当した第12版 (1843年) と第13版も比較したが、2つの観光項目が加えられていたものの、ライン川観光の重点に

12 Murray 1836, 序文 p. A3.

置くガイドブックにはかなわなかった。先述した通り、その時期以降、マレーが出版したガイドブックの情報量が変化した。マレーの編集も少し見てみよう。まず、マレーは1～2日の滞在を提案する。観光客が自然に散策することも具体的に提案した。歴史や伝説も紹介する。場合によっては独自の解説も加える。聖ヴェルナーの受難話についてヨーロッパ内の類似する話の存在を指摘し、ユダヤ人の迫害や、彼らから財産を強請するための虚偽であったという背景を鋭く説明している。以前のガイドブックでは、この伝説が事実のように伝えられていたが、ベデカーはこの話を「伝説」と呼び、それ以上のコメントを付けていなかった。1852年版と比較した。宿泊施設の情報を替えて（実際に利用した読者の情報）、見つかりにくい登り路を削除し、代わりの散策案を紹介し、ライヘンベルク（Reichenberg）城を盛り込んだ。それは、ベデカーの影響を受けてのことだと思われる。

表3でライヒャルトの1811年版（652頁、35行、1行45字）、ライヒャルト・ヘルビヒの1846年版（414頁、38行53～59字）、マレーの1838年版（545頁、～38字×2）、クライン・ベデカーの1849年版（424頁、1ページ32行1行52～55字）のオーバーウエーセル～ザンクトゴア間の情報を比較する。

マレーとベデカーの情報量はライヒャルトよりもはるかに多い。時代的な背景から考えると、ライン川がスイスや温泉町への通過点から観光目的地へと変わったことが反映されていた。ドイツ側はライン地方のワイン産業を代表的なものと指摘するが、マレーはこの周辺のブドウ栽培・酒造を無視した。比較対象のすべてのガイドブックでサケ漁に触れているが、ベデカーだけが詳しく説明している。後版では、交通の増加や環境破壊に伴う収穫量の減少にも触れている。マレーは中世のユダヤ人迫害について鋭く解説していた。それに関して、ベデカーは控えめに「伝説」と示唆している¹³。

ヴィースバーデン（Wiesbaden）の項目について簡単なボリュームの比較も行った。ライヒャルトの時代には温泉旅行が主流の一つであったので、ライヒャルトはライン溪谷以上に温泉街のことを詳しく説明したものと考えられる。ヴィースバーデン関係の文字量は、ライヒャルト約6490字¹⁴、ベデカー約8003字¹⁵、マレー約15330字¹⁶となっている。ヴィースバーデンに関する情報量はマレーが最も多い。マレーは情報を精査していたが、ベデカーやライヒャルトも十分な情報を提供している。その中から1つ例を取り上げると、ヴィースバーデンのクアザール（療養広間＝社交の場）については、マレー約2200字、ベデカー約1260字、ライヒャルト約440字になっているので、項目ごとでもマレーが長く、ライヒャルトにおいては短くなる傾向が見られる。

マレーが晩年に自身のガイドブック編集とベデカーとの関係を振り返って文書を残している¹⁷。

13 ただし、ベデカーが同じガイドブックの中でフランクフルトのユダヤ人街について説明した際には、その差別を批判的に説明していた。ドイツ語の1862年版 p. 52.

14 1846年版 p. 111～114、118行、1行あたり54～58字。

15 p. 156～161 151行53字。

16 1838年 p. 398～402 438行 35字。

17 Murray, John III 1919.

これがきっかけとなってイギリスの新聞でベデカーのガイドブックが高く評価され、マレーは自身の功績が母国でさえ忘れられたと感じて立腹したそうである。まず、マレーが強調するのは、信頼のおけるガイドブックがほとんどなく、ドイツ語を再復習して自ら現地で調べ、自身が1829年に大陸に渡った際にはガイドブックがほとんど存在しなかったことである。特にドイツ北部の情報は自身が開拓したと強調する。自分で情報を収集し、編集して、その後、父がハンドブックと命名した(1836年)¹⁸。その後、スペイン・エジプト・北イタリア・パレスチナ・ギリシャ・アルジェリア・シチリア島等の地域別に担当者を任命した。マレーはドイツ語が話せたと伝えられていたことから、ライヒャルトのガイドブックのことを知らなかったはずはない。

ベデカーに関しては、マレーが情報の編集方法を真似ていただけであり、それがベデカーのガイドブックの序文で認められていて、ベデカーからマレーに宛てた手紙の中でそのことに謝意を表していた。また、ベデカーのガイドブックの中には、マレーのガイドブックから引用した情報もある。例として、マレーは地層学に興味があり、自ら調べたある岩について英語からドイツ語への翻訳ミスがあったのだが、長年にわたりそのまま掲載されていた。マレーによると、ベデカーあるいはその担当者が自分で調べていなかったとのことである。しかし最近になって、ベデカーのガイドブックでは無断で引用されていたことが明らかになった。マレーのハンドブックの特徴であった赤い表紙までもベデカー社が模倣していた。法律上、このような行為は問題ないそうである¹⁹。ただしマレーも、ベデカーのガイドブックから情報を取り入れたことをガイドブックの序文で認めていた²⁰。

1830年、ベデカーがマレーより早く、初めてクライン (Klein) 教授のガイドブックを出版した。その後、ベデカーが少しずつ編集し直したが、マレーのガイドブックがベデカーの編集にとって大きなヒントとなった。そのことは、ベデカーが序文で認めている。ただし、イギリス人のためのガイドブックとドイツ人のためのガイドブックのニーズが違うことから、彼は、自著になると主張している。マレー側からの問題は、ベデカーによる英語市場への進出であったと推定できる。ベデカーが内容をマレーより分かりやすく整理した。マレーが1ページを2列に別け、それで2列合わせて1行に平均66字を掲載した。

ベデカーは、1行に平均して55字を掲載したので、読みやすかった。ある街の誕生がベデカーのガイドブックではその街の旅行用の基礎情報として紹介されたことから、マレーよりわかりやすい区別がされていた。しかし、ベデカーは括弧を使って、文章により多くの情報を盛り込むことができた。情報を文章で伝えるのではなく、キーワードの後の括弧の中に観光客に必要な情報を手短かに盛り込むことができた。ベデカーは産業発展について記述した。したがって、マレー以上に交通手段と産業の発展が記録されていた。

18 ライヒャルトの第1作のタイトルは Handbuch für Reisende であったので、マレーがドイツ語からタイトルを借用した。

19 Coghlan はライン川全体の説明が自分のアイディアであった(1835年出版)が、マレーがそのアイディアを Coghlan に礼を述べないままに使ったと強調する。Coghlan 1845, p. IX.

20 Murray 1855.

マレーが非常に巧妙な比喩を使い、またこだまを用いて、市長を嘲笑するようなことを喜んで載せた。ベデカーにはそのような話は盛り込まれなかった。マレーもまた個人的な意見を表明した。ベデカーは、マレーほどに個人的な意見を述べなかったが、一部、自身の意見を記載した。創設者のカール・ベデカー時代にはそうした個性や愛国心はまだ見られたが、時間の経過とともに淡々とした口調へと変わっていった。ラインフェルス城 (Burg Rheinfels) に関して、読者の感情を刺激した上で事実を広く伝えるように変わった。たとえば、「壮烈な最期」から表現が「戦場に残る」に替えられた。

3. ベデカーの編集作業

高等学校の教師であったクライン (1778-1831) が1828年、レーリンク社 (Röling) で『マインツとケルンの間のライン川の旅』を出版した。序文の中では、急いでいる旅行者 (Schnellreisende) に配慮し、最も面白い場所をまとめたと説明した²¹。さらに、妻の絵を添えた。旅行情報 (美術館・図書館、宿泊施設、交通手段・出発時間・運賃) が巻末に加えられた。南から説明しているが、目次や索引がなく、使いにくかったと思われる。レーリンク社が1829年にこのガイドのフランス語版を発売した。ベデカーがそれを引き継ぎ、1830年に出版した。ベデカーは、付録を落として地図を加えた。クラインは、1831年に『モーセル川の旅』を自費で出版した²²。ベデカーとの協力を拒んだと考えられる。19世紀初めからライン川についてのさまざまなガイドブックが出版された。その中でクラインのものを超えるほど有名であったのは、Alois Schreiber²³のガイドブックであった。クラインがシュライバー (Schreiber) を部分的に無断筆写した²⁴。シュライバーはバーデン大公国の人であったので、バーデン地方のライン河、またライン河全体を対象にした。このガイドブックは1806年にドイツ語と1807年にフランス語で出版された。当時、ライン川の左河畔がフランス帝国の領土であった。

ラインフェルス城の説明がそのまま第2版に登場したが、クラインによる執筆と思われる。愛国心から、ドイツ人から見た屈辱的な司令官たちの逃亡や彼らの刑罰を詳述した。後にベデカーが刑罰の分を減らし、18世紀半ばのフランス軍による城の占領の記述を加えた。1693年の勇敢な防御と1794年の屈辱的な逃亡の対比構造を緩和し、18世紀中にこの要塞が2回にわたってフランス軍の手に落ちたことで、1794年の逃亡劇の評価が少し変わったと考えられる²⁵。

ドイツ語版の第2版では、領域がストラスブール (Strasbourg) からロッテルダム (Rotterdam)

21 p. IV.

22 Klein 1830 序文。

23 Schreiber 1816, 528頁。

24 シュライバーがフリドリヒ・フォン・シェンベルク (Friedrich von Schönberg) の壮烈な最期 (Heldentod) を書いて、クラインはその文をほぼ同じ言葉で書いて、ベデカーが1849年版までこの記載を引き継いだ。1860年代に、ベデカーがより落ちついた口調で「戦場に残った」と言い換えて、この將軍の墓がウェストミンスター寺院 (Westminster Abbey) にあることによって、その国際色を強調した (p. 212)。

25 第2版に1693年に残して隠されたフランス軍の大砲等の話 (p. 72) が第6版まで消えていた。

に広がった。地図を2枚添え、クラインの妻の絵の版画をライン川の画家ラビンスキの絵に替えた。19世紀の初めからいくつかのライン川のガイドブックが出版された。その中で最も知名度高かったのはシュライナーであった。

ベデカーの編集作業を見てみる。星マークの導入は、多くの場合、マレーによるものとされているが、ベデカーが1853年版の『スイス』よりホテル評価のために導入した。しかし、同じ年の『ベルギー』には盛り込まれなかった²⁶。1855年の『ドイツ』には特別に推奨される観光名所に星マークが見られる。1844年には、旅行情報が巻頭に設けられた。マレーは、1870年代まで星マークを導入していなかった。1860年版の『ドイツ』には宿泊施設の評価が評価者の主観的な見方であるとして、評価方法を問題視した²⁷。1849年から1862年の間、鉄道が開通し、新しい市役所が建てられ、新規に付け加えられた。サケ漁が環境破壊によって激減することも指摘している。ラインフェルス城の歴史の説明が変わった。逃亡した司令官の裁きが1849年に紹介されたが、後になって逃亡だけが伝えられるようになった。18世紀にフランス軍が城を占領した情報が1862年版には紹介された。全体的に、1862年版には具体的な数字（高さ等）が増えた。科学が浸透したことが背景にあると思われる。プロテスタント系やイギリス人観光客への配慮が見られる。1つは、グスタフ・アードルフ（Gustav Adolf）、スウェーデン国王（プロテスタント教信者には守護人と崇められた）と英国女王に対する称賛が付け加えられた。19世紀初めに途絶えた慣習にイギリス観光客への配慮が見られることが面白い。英語版のために市役所、トンネル開通、言葉関係の記述などを削除してさらなるスリム化を図った。

表3でクライン・ベデカーの1849年版（424頁、1ページ32行、1行52～55字）、ベデカーのドイツ語1862年版（346頁、1ページ47行、1行60～64字）、のオーバーウエーセル～ザンクトゴア間の情報を比較する。

ベデカーが星の評価を導入した。まず、お薦めのホテルに星マークを付け、その後、忙しい旅行者向けに名所旧跡を絞るためのマークへと変化した²⁸。ベデカーは、段階的に近代観光の象徴的な新制度を発明した。それ以前に、マリアナ・スタークが旅行記に美術館に収蔵されている名品をハイライトするために感嘆符を使っていたが、ベデカーがそれを意識したのかどうかは不明である。マレーは、ドイツに行く前にスタークを意識したと書き残した。しかし、マレーがベデカーより後（70年代）に星マークを利用したのである。ただし、ルートのアイディアはマレーによるものであった²⁹。

ベデカーは、ある街の基本的な旅行情報を紹介文の前に設けることをマレーから習ったそうである。ベデカーは、早いペースで更新したため、データはより正確であった。ベデカーは、他のガイドブックよりも多くのより詳細な地図を入れた。これは、科学を重視する時勢を反映したと考えられる。英語版では情報が若干省略された。イギリス人にとって、ドイツ語の表現

26 スイス版では1854年、ドイツ・オーストリアでは1855年に宿泊舎の星マークが採用された。

27 Baedeker 1860 p. V.

28 Baedeker 1846.

29 Mendelson.

表3 19世紀前半・中期の6冊のガイドブックにおけるサンクト・ゴアとオーバーヴェーセルの間のライン溪谷の説明の比較

サンクト・ゴア	Reichard 1811	Herbig 1846 ¹³	Murray 1836	Klein/Baedeker 1849 ³⁰	Baedeker 1862	Baedeker 1864
	宿：「ダリーネ・バウム」 「リリエ」	宿：「リリエ」 「ウィル ダー・マン」	宿：「リリエ」 「郵便屋」 三つが快速で、よく停 泊させる いいがよく泥 んでいる	宿：「リリエ」、「クローネ」	宿「リリエ」、「クローネ」	宿「リリエ」、「クローネ」
	ライン・モースル県第22 番郡の中心都市ザンク ト・ゴアで関税のため着 陸しなければならぬ	ラインフェルス要塞が今 破壊された、絵のよう で、みなに進める	ラインフェルス城、素晴 らしい修景、その歴史が 面白い、苦痛に登りだが いい眺めが代償。歴史	ラインフェルス城の歴史 登る価値ある展望 守衛で鍵をもらう	ラインフェルス城の歴史 タラール公の包囲失敗 1758年、不意に襲撃でフ ランス軍に1763年まで占拠 1794年、司令官の逃亡 展望がきれい 守衛が鍵を持って、夏季に だいたい城の周辺に在る 城の隣にラインフェルス・ ホテル（値段）位置、テラ スと庭がある	ラインフェルス城の歴史 タラール公の包囲失敗 1758年、不意に襲撃でフ ランス軍に1763年まで占拠 1794年、司令官の逃亡 破壊、売却 プロイセン国王所有 内部に特に面白くない 展望が限られている 守衛が町に住んでいるが、 だいたい城の周辺に在る
			通世者ザンクト・ゴアが 野蛮な住民に説教した、 町の名前となった。満と 中州の難所や妖精の誘い から救った船乗りの守護 聖人 奇跡	通世者ザンクト・ゴアの 説明、船乗りの守護聖人	通世者ザンクト・ゴアの 説明、船乗りの守護聖人	通世者ザンクト・ゴアの 説明、船乗りの守護聖人
			プロテスタント教会1465 年、都市の中心の近く、い い建築	プロテスタント教会 1468年	プロテスタント教会 1468 年 伯爵フィリップと妻の墓石 祭壇に撃ち落とし部分： グスタフ・アドルフス ウェーデン王がスベイン軍 のふるまいに怒って撃ち落 とした 以前、地下埋葬室に通世者 の遺骨があったが、今は消 防用真が保管	プロテスタント教会 1468 年 伯爵フィリップと妻の墓石 祭壇に撃ち落とし部分： グスタフ・アドルフス ウェーデン王がスベイン軍 の振舞いに怒って撃ち落 した 以前、地下埋葬室に通世者 の遺骨があった

30 Klein/Baedeker (1987⁴).

			カトリック教会に通世者の像がある	カトリック教会		カトリック教会 聖人の像、刻んだラテン語の題
				ベネディクト派修道院		
				テンブル騎士団の荘		
				19世紀初頭までの御掬い慣習 カル大帝・領主・社会への乾杯と寄付が求められる この習慣に使われた王冠、コップ、1713年からの記録はホテル「リリエ」にある	19世紀初頭までの御掬い慣習 カル大帝・英国女王・領主・社会への乾杯と寄付が求められる この習慣に使われた王冠、コップ、1713年からの記録はホテル「リリエ」にある	19世紀初頭までの御掬い慣習 カル大帝・英国女王・領主・社会への乾杯と寄付が求められる この習慣に使われた王冠、コップ、1713年からの記録はホテル「リリエ」にある
			ザンクト・ゴアースの後者の出からローレライに向かつていい眺めがある、七か七ガイド無しで道が見つけにくい ミュレン谷への散歩	遠足の拠点 詩人の滞在歴		
			城壁がある村	市壁、塔	きょう廊がある市壁、見張り塔	
				宿：「ナッサウアー・ホーフ」「アードラ」	宿：「ナッサウアー・ホーフ」「アードラ」	宿：「アードラ」、年段、ビール酒造、ライン川で泳げる 「ライニシャー・ホーフ」
			ザンクト・ゴアからの渡し船が何時も用意されている	最近の30年間の新しい町並みができた	遠足の拠点 最近の30年間の新しい町並み、洪水にたいする堤、洪水の時の逃げ道 新しいプロテスタント教会	遠足の拠点 最近の30年間の新しい町並み、洪水に備える堤防 ザンクト・ゴアへの渡し船
			ザンクト・ゴアがライン川の最もきれいな景色の中で、1-2日の停泊に最適、眺めは最も絵画的な側の岩場が荒らしい	新カッツェンエンボーンゲン城（カッツ）その歴史と今の所有者 ザンクト・ゴアースハウゼンに鍵を持つガイドが要る（18kr. ナッツ）	新カッツェンエンボーンゲン城（カッツ）その歴史と今の所有者 ザンクト・ゴアースハウゼンに鍵を持つガイドが要る（18kr. ナッツ）	新カッツェンエンボーンゲン城（カッツ）その歴史と今の所有者 ザンクト・ゴアースハウゼンに鍵を持つガイドが要る（18kr. ナッツ）
			向こう側に位置するカッツ城の歴史と運命がよく知られている	右側・左側のヘッセンラントとフランケンラントといういい方	右側・左側のヘッセンラントとフランケンラントといういい方	ヒュナーベルクの展望の東屋
			左右の河岸がきれいな景色、特にボルンホーフエーが自然景観風靡			
ザンクト・ゴアースハウゼン						

	近くにはスイス谷と呼ばれたところがある	フロシユバハ川の綺麗なスイス谷、岸壁の中に多くの滝があり、多くの水車もある	スイスの谷 パーテルスベルクとその赤ワイン	スイスの谷 3/4時間 パーテルスベルク經由ライヒェンベルクにパーテルスベルクとその赤ワイン ハイキング道 ハセル川谷に道路（郵便馬車ルート）がライヒェンベルクに；ザンクト・ゴアースハウゼンに馬車を借りられる；スイスの谷からローレライまで散歩道	パーテルスベルク ハセル川谷に酒造場 *スイスの谷 ローレライまで散歩道
				右側・左側のヘッセンラントとフランケンラントといういい方	
		ライヒェンベルク城	ライヒェンベルク城、歴史、所有者	ライヒェンベルク城、歴史、所有者	ライヒェンベルク城
宿「ツム・エンゲル」	宿：「トリリーリシヤ・ホーフ」「金の栓抜き」 「ライニシヤ・ホーフ」	宿：「ライニシヤ・ホーフ」「トリリーリシヤ・ホーフ」	宿「ライニシヤ・ホーフ」「金の栓抜き」にシェレーターの看板がある、「トリリシユアー・ホーフ」	宿「金の栓抜き」にシェレーターの看板が中にある、「トリリシユアー・ホーフ」、「ライニシヤ・ホーフ」	宿*「金の栓抜き」にシェレーターの看板がある、「ライニシヤ・ホーフ」、「トリリシユアー・ホーフ」
		ローマ人のヴェザリア小さな町 人口2300人	ポイティンガー図でローマ時代のヴォサヴィア	ポイティンガー図でローマ時代のヴォサヴィア	ローマ時代のヴォサヴィア
		市壁と多数の塔と多くのゴチック様式の建物	市壁と多数の塔 もとは帝国の自由都市だったが、皇帝が弟だったトリール選帝大司教に担保として渡した	もとは帝国の自由都市だったが、皇帝が弟だったトリール選帝大司教に担保として渡した	もとは帝国の自由都市だったが、皇帝が弟だったトリール選帝大司教に担保として渡した
	リフォーームした、純粋ゴチック市区建てられた 基金教会いくつかの言い 絵画と美術品	聖母教会、町の外、豊かな装飾、ライン地方のゴチック様式の霊。 1331年。クワイヤの高さ80フィート。祭壇、緊迫くばみに預言者等の彫刻、優雅な細かい彫刻。 シヨムベルク家の墓 赤ちゃんはいはるいはるのよう	聖母教会 1331年 クワイヤシールド、クワイヤと身廊の間の台、高い祭壇で立派な彫刻 1504年のペトルス・ラテルン作の木版絵画：聖ウルスラと同伴者・最後の裁判 シェーンベルク騎士と伯爵の墓石	*聖母教会 15世紀初頭 クワイヤシールド、クワイヤと身廊の間の台、高い祭壇で立派な彫刻 1504年のペトルス・ラテルン作の木版絵画：聖ウルスラと同伴者・最後の裁判 シェーンベルク騎士と伯爵の墓石	*聖母教会 15世紀初頭 クワイヤシールド、クワイヤと身廊の間の台、高い祭壇で立派な彫刻 二つの絵画：聖ウルスラと同伴者・最後の裁判 シェーンベルク騎士と伯爵の墓石

ミノリテン教会、いい絵画		マルティンス教会 ディーベンベックの「十字から降ろされる」聖マシュー教会の建築も面白い	マルティンス教会 ディーベンベックの「十字から降ろされる」絵画と二枚の古式ドイッツ木版絵画	マルティンス教会 ディーベンベックの「十字から降ろされる」絵画と二枚の古式ドイッツ木版絵画
			1833年、ここに交通事故で亡くなったドレスデン市からのフォン・ルビーニーク婦人の記念碑	1833年、ここに交通事故で亡くなったドレスデン市からのフォン・ルビーニーク婦人の記念碑ザクセン王妃の執事長
エンゲルヘルのワインは有名	エンゲルヘルのワインは有名		エンゲヘル：多くの画家が訪ねる、プロイセンの最も良いラインワイン	エンゲヘル：プロイセンの最も良いラインワイン
		河岸の丸い塔は絵のように	オクセン塔 古い門	オクセン塔 古い門 驢馬の門
		ウエルナーチャヤベル少年がユダヤ人に殺されたといわれた （英国でも Gloucester Lincoln） 追討やお金を脅す口実	ウエルナーチャヤベルとその伝説	ウエルナーチャヤベルと彼の伝説 ウエルナーチャヤベルと言われた殺人
			ロスシュタインと「7人の乙女」	ロスシュタイン、その下に右河岸鉄道のトンネル、ローレライより上流深さ72 1/2F。「7人の乙女」
			左河岸に爆発物を使ってドネル開通	1849年に建設された中世風の市役所・旗塔
	古い、崩れたシェーベルク城は岩の上の壁にそびえ立つ、ピロ柱線のアムブレヒト王子が再建している。一と周りが素晴らしい	シェーンブルク 将軍（城の美しい7人お嬢様から名付けられた）	シェーンブルク 今プロイセンのアムブレヒト王子が所有する フリドリヒ・ヘルマン・フォン・シェーンブルク将軍の紹介：フランスの将軍としてボルチュエガル王家をスペインに對して守った、後にプロイセンの将軍になった、最後に英国王の意義留守のオラニエ王の旧王に勝ちながら戦死した、城の歴史	シェーンブルク 今、城と隣接農家がプロイセンのアムブレヒト王子が所有する フリドリヒ・ヘルマン・フォン・シェーンブルク将軍の紹介：フランスの将軍としてボルチュエガル王家をスペインに對して守った、後にプロイセンの将軍になった、最後に英国王の意義留守のオラニエ王の旧王に勝ちながら戦死した、墓はウェストミンスター寺院にある城の歴史

鮭漁	鮭漁	鮭漁が盛んでいる	鮭漁 王附属の権利 1488年 良い年、漁は8000ポンド 以上、 最も良い漁地「ウァーク」 漁の方法の説明	鮭漁 王附属の権利 1488年 良い年収穫は8000ポンド 以上、今は1000ポンド、 汽船や河岸開拓のせい、 値段 最も良い漁地「ウァーク」 漁の方法	鮭漁 漁は以前8000ポンド以上、 現在1000ポンド、汽船や 河岸開拓のせい、値段 狭くて深くなる
「中州」に注目すべき、で 船がたまたに座礁する、 (1792年私のヨットのよう に)	鮭漁	鮭漁	渦が危ない、「中州」で船 がたまたに座礁する	浅瀬 渦 右河岸に街道	
ローレライ岩と15回のご だま	ローレライ岩と15回のご だま	ローレライ山 向こう側に洞窟があり、 その人が銃の発砲・ ピュエグルでこだまを起 こす (洞窟にトランベッ ト人) 15回に戻ってくる と言われている。景観が いいドイツの学生がこだ まに「ヴェーセルの市長 はだれ」と聞いて、こだ まが「エーセル」(ドイツ 語で馬鹿) と答えている 市長さんが好まない	ローレライ伝説 こだま 「ライ」ハこの地方で岩・ 崖の意味、だからローレ ライヤマは無駄	ローレライの高さ 傾いたナポレオンの横顔 に似ている 新しくできた登り道。25 分、眺めが限られている ブレントノ氏1800年 「ローレライ」と書いた、 ハイネの詩とシルビヤ の作曲で普及した 中世の詩人：こはニベ ルンゲン	ローレライの高さ 登り道、ペンチ シレネスの伝説 徒歩者だけがこだまが聞 こえる
		渦やこだまによって妖怪 がここに住む迷信を生ん だに違いない	こだま：交通がない朝早 いと夕方遅い徒歩者だけ がこだまが聞こえる 奇妙なアイディア、山頂 で魔女の銅像建設が噂 「ライ」はこの地方で岩・ 崖の意味、だからローレ ライ山の言い方は無駄		

Reichard, Heinrich August Otokar (1811¹): *Der Passagier auf der Reise in Deutschland, in der Schweiz, zu Paris und Petersburg Ein Reisehandbuch für Jedermann*, Gäddecke.

Reichard, Heinrich August Otokar (1846¹⁵): *Der Passagier auf der Reise in Deutschland und einigen angrenzenden Ländern*, Herbig.

Murray, John (1836): *A Hand-Book for Travellers on the Continent*, Murray.

Klein, Johann August /Baedeker, Karl (1987⁴): *Rheinreise*, Harenberg.

Baedeker, Karl (1862): *Die Rheinlande von der Schweizer bis zur Holländischen Grenze*, Baedeker.

Baedeker, Karl (1864): *Rhine A Handbook for Travellers on the Rhine*, Baedeker.

の議論が無意味だと考えられたためである。

ベデカーは、ホテルの経営者に影響されずに客観的に評価すると強調し、旅行者からはその正確さが評価された。マレーのハンドブックには広告の頁も盛り込まれていたもので、その客観性が少し疑わしかったのかもしれない。

まとめ

旅行産業の発達とともに、ガイドブックが提供する内容は大きく変化した。19世紀には、ガイドブックを購入できる中流階級が盛んに旅行に出掛けた。そうした旅行には、さまざまな危険や無駄な費用が伴った。そのためライヒャルトがあらゆる情報を収集し、危険や無駄な出費の回避に役立つガイドブックを編集した。そのきっかけは自身の旅行のための情報収集であった。そこに自身の実際の旅行経験を盛り込んだ。そうしたガイドブックが時代のニーズを満たしていたので、ライヒャルトやその出版社はこの路線を突き進めた。そうした成果の一つとして、ライヒャルトは、実際に旅したことのない地域に関するガイドブックを編集した。2つ目は、完成したガイドブックを外国語で出版することであった。ライヒャルトの情報収集と精査力が評価され、19世紀初めにはまだ珍しかった情報を更新したことにより、ライヒャルトはガイドブックの代名詞となった。ライヒャルトの亡き後、出版者のヘルビク (Hellwig) が編集・情報更新を引き継いだ。新たな交通手段の発展、それに伴う観光産業の誕生によって、ライヒャルトのガイドブックの要であった旅行方法の案内の重要性が低減し、見学行動が重要になって、ライヒャルトガイドブックの微調整では対応できないまでになった。

新しいタイプのガイドブック著者が自身の旅行体験に基づいて、ガイドブックを著作した。情報源は客観的な観察者を演じる著者である。旅行の方法に割かれるボリュームが減り、見学の部分が増やされた。ベデカーは部分的にマレーの影響を受けていたが、情報整理をより進め、よりコンパクトなガイドブックが作られるようになった。晩年のマレーがベデカーの業績を認めず、自身のガイドブックの模倣だと書いていたが、1840年代の状況では、その指摘が当たっていたのかもしれないが、それ以降、ベデカーの編集がマレーをリードするようになった。1900年、マレーの息子がガイドブックの著作権を手放したが、ベデカー家が2つの世界大戦を経て20世紀後半までガイドブックを出版し、今でもベデカーの名によるガイドブックが出版されている。ガイドブックの内容を研究して当時の観光のあり方を研究することができる。また本文では、2つの例しか紹介することができなかったが、ライヒャルトやマレー、ベデカーの世界観を研究することも有意義なテーマであろう。

参考文献

- Baedeker, Karl (1862): *Die Rheinlande von der Schweizer bis zur Holländischen Grenze*, Baedeker.
 Baedeker, Karl (1864): *Rhine A Handbook for Travellers on the Rhine*, Baedeker.
 Baedeker, Karl (1846): *Deutschland und österreichische Länder*, Baedeker.

- Baedeker, Karl (1860): *Deutschland nebst Theilen der angrenzenden Länder*, Baedeker.
- Bouillet-Chassang (1914): Dictionnaire universel d'histoire26 Q-Z 1878, p. 1592. https://fr.wikisource.org/wiki/Page:Bouillet_-_Chassang_-_Dictionnaire_universel_d%27histoire-geo_-_1878_-_P3_-_Q-Z.djvu/26.
- Coghlan, Francis (1845): *Hand-Book for European Tourists through Belgium, Holland, The Rhine, Germany, Switzerland, Italy, and France*, London.
- Klein, Johann August (1828): *Rheinreise von Mainz bis Köln*, Röhling.
- Klein, Johann August (1831): *Das Moselthal zwischen Koblenz und Zell mit Städten, Ortschaften, Ritterburgen*, Selbstverlag.
- Klein, Johann August /Baedeker, Karl (1987⁴): *Rheinreise*, Harenberg.
- Koshar, Rudy (1998): *What Ought to Be Seen': Tourists' Guidebooks and National Identities in Modern Germany and Europe*, *Journal of Contemporary History* Vol. 33, No. 3, pp. 323-340.
- Mendelson, Edward (1985): *Baedeker's Universe*, Yale Review of Books.
- Murray, John (1855): *A Hand Book for Travellers in Southern Germany*, Murray.
- Murray, John (1832): *A Hand-Book for Travellers on the continent*, Murray.
- Murray, John (1836): *A Hand-Book for Travellers on the Continent*, Murray.
- Murray, John III (1919). "The Origin and History of Murray's Handbooks for Travellers". *Murray's Magazine*. Reprint: *John Murray IV*, "The Origin and History of Murray's Handbooks for Travellers", *John Murray III, 1808-1892: a Brief Memoir*, Murray.
- Reichard, Heinrich August Ottokar (1822): *An Itinerary of France and Belgium, or, An Account of the Post and Cross Roads, Rivers, Canals, Principal Inns, Coins, Modes and Price of Travelling*, Leigh.
- Reichard, Heinrich August Ottokar (1803²): *Der Passagier auf der Reise in Deutschland und einigen angränzenden Ländern*, Bureau d'Industrie Weimar.
- Reichard, Heinrich August Ottokar (1811⁴): *Der Passagier auf der Reise in Deutschland, in der Schweiz, zu Paris und Petersburg Ein Reisehandbuch für Jedermann*, Gädicke.
- Reichard, Heinrich August Ottokar (1846¹³): *Der Passagier auf der Reise in Deutschland und einigen angränzenden Ländern*, Herbig.
- Reichard, Heinrich August Ottokar (1820): *Guide des Voyageurs dans la Grande-Bretagne et dans le Royaume des Pays-Bas*, Bureau d'Industrie Weimar.
- Reichard, Heinrich August Ottokar (1821⁹): *Guide des Voyageurs en Allemagne, en Hongrie et à Constantinople*, Bureau d'Industrie Weimar.
- Reichard, Heinrich August Ottokar (1827): *Guide classique du Voyageur en France, dans les Pays-Bas et en Hollande*. Audin.
- Reichard, Heinrich August Ottokar (1784): *Handbuch für Reisende aus allen Ständen*, Leipzig.
- Reichard, Heinrich August Ottokar (1820): *Guide des voyageurs dans la Grande-Bretagne et dans le Royaume des Pays-Bas*, Bureau d'Industrie Weimar.
- Reichard H., Pezzl J. (1826): *An Itinerary of Germany; or, Traveller's Guide through that country, to which is added an Itinerary of Hungary and Turkey*, Calignani.
- Rupp, Fritz (1908): *H.A.O. Reichard, sein Leben und seine Werke*, Dissertation Marburg.
- Schreiber, Alois (1816): *Anleitung auf die nützlichste und genußvollste Art den Rhein von Schaffhausen bis Holland das Murgthal nebst Baden bey Rastatt, die Mosel von Colenz bis Trier, und die Bäder am Taunus, sowie Aachen und Spaa zu bereisen*, Engelmann.
- Starke, Mariana (1828), *Travels in Europe Between the Years 1824 and 1828*, Murray.
- Uhde, Heinrich (1877): *H.A.O. Reichard (1751~1828) Seine Selbstbiographie*, Cotta.
- 石井 昭夫 (2009) 「旅行ガイドブックの始まり～マレーとベデカーのガイドブック・シリーズ～」『国

際観光情報』日本政府観光局、p. 3～7.

加賀美 雅弘 (2009) 「旅行ガイドブックに描く風景 ベデカー『ドイツ帝国』の記述から考察」、『東京学芸大学紀要』60 人文社会化学系 II、p.59～72.